

「役に不足はおまへんか」

「定はん貴郎に役割をして貰ふて、何の不足がおますかいな」

「不足が無ければ、此間からチョツと書いといた抜き書を渡しまへるか、松さんこれ寅はんはこれ、喜いさんはこれ」

「定はん、臺詞が仰山おまんな」

「見ると紙数が仰山でも、読んで貰ふたら何程もおまへんで、そんなら臺詞の稽古をしまひよか」

「どうぞお頼み申します」

「最初、兄弟の順禮が苩を喫んで居る處へ、敵持が苩の火を借りに來る、松さん貴郎から臺詞に掛つとくなアレ」

「へエ、エーと、そつじながら、たばこの火を、ひとつ、おかしください」

「モシ松さん、なんや本を讀んでる様だんな、最少し力を入れて、率爾乍ら苩の火を一つお貸し下され、とな」

「率爾乍ら苩の火を一つお貸し下され」

「へエ寅はん、貴郎の臺詞だつせ」

「エーと、エーさあさ」

「よい／＼、よい／＼、よいやさ」

「モシ、相手になりなはんな」

「けども、こうなりまんがな、エーさアさよいよいと」

「寅はん貴郎の言ひ様が悪い、エーさアさと言ひなアる依つてに、いきまへん、エーは言はずに、サア／＼打立の清い火ぢや、チャツとお付けなされませと」

「サア／＼、打立の清い火ぢや、チャツとお付けなされませ」

「寅はん二枚目だすせ、力を入れずに柔かう宜ろしいか、松さん苩の火を付けに行て、お互に顔を見てから、後の臺詞に掛つて貰ひます、寅はん貴郎から」

「ヤア珍らしや、汝、黒煙五平太ならずや」

「松さん貴郎」

「わがなをしーつーたる」

「しつたるでは具合が悪い、矢つ張り知たると」

「我名を知たる 其方は」

「寅はん」

「知たも無理か、三ヶ年以前、我父蒸氣登之助を討て立退き」